

## 館蔵「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」について

小澤 弘\*

### 目次

- はじめに  
1. 「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」  
2. 東海道最初の宿駅・品川宿  
3. 金地貼札の墨書とその検討  
4. 本図巻の製作意図など  
おわりに

キーワード 浜御殿 品川宿 品川新宿 江戸往還

### はじめに

東京都江戸東京博物館の所蔵する「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」は、明和3～8年[1766-71]頃の作品とされる。本稿では、この大江戸時代の品川宿までの往還に見る豊かな景色を描いた絵巻について調査分析を行い、街道図や分間絵図、地誌、地図などの情報と照合しながら比較検討を加える。

### 1. 「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」

この無款の「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」紙本著色絵巻1巻は、当館開館前の1991年に収蔵された。資料番号は91210021である。また資料の寸法は、縦29.2cm、横712.0cmである。口絵カラー図版として全図【口絵1～15】を掲げた。

本資料は、築地の浜御殿（今の東京都立浜離宮恩賜庭園）から東海道筋を上り、東海道五十三次の第1番目の宿場・品川宿に至る往還（道中）を江戸内海側から俯瞰した構図で描いている。その往還の海岸沿いには、将軍家の別邸・浜御殿をはじめ、大名家の屋敷や庭園が描かれる。また八つ山や御殿山などの高台には、江戸後期には眺望の広がりて人々の集う名所となっており、画中には桜花を愛でる人たちの姿が描き込まれている。東海道の西側高台沿いには、将軍家の菩提寺の一つ増上寺をはじめとし、樹木を縫って泉岳寺や濟海寺、東海寺などの多くの寺院が見える。江戸への入口にあたる高輪の大木戸、そこは石垣のみで木戸はなく、その大木戸を前後にした町には、重い荷持を江戸市中へ運搬するための

\*東京都江戸東京博物館都市歴史研究室長

牛車の施設を備えた牛町、車町が見える。海岸縁の洲には、洲崎弁天が勧請され、深川の洲崎弁天との間を結ぶ江戸前の豊かな漁場がそこには展開している様子がうかがえる。また沖合には、帆を下ろしたマストだけの大型帆船が停泊している様子がある。

## 2. 東海道最初の宿駅・品川宿

江戸の日本橋をスタートして東海道の第一番目の宿駅が「品川宿」である。日本橋から2里、今の8kmに相当する。徳川家康の江戸入りは天正18（1590）年8月のこと。以来、戦国大名の城下町として江戸は造成され、慶長6（1601）年には諸国への主要街道の整備と宿駅の制度が定められた。慶長8年に将軍となった家康は、江戸に幕府を開いた。この年、五街道の起点が町人地の中心地に架けられた日本橋とされた。これ以降、三百諸侯の参勤交替の制も相俟って、日本橋と全国を繋ぐ交通網が大いに発達したのである。

五街道のうち第一の幹線である京への道は東海道で、途中53の宿駅が置かれた。第1番目の宿駅となった品川宿は、150家におよぶ西国諸大名の江戸出府や、京の朝廷からの勅使・院使、阿蘭陀商館長・朝鮮通信使・琉球使節の江戸参府、そして上方からの職人・商人・芸能者と、多くの人びとの往来で殷賑をきわめた。古代の駅制によって作られていた東海道の駅路は、江戸が政治の拠点となったことにより、幹線道路として江戸地代に大きく発展したのである。

品川宿は、目黒川（品河）に架かる中橋を境に、東海道筋の細長い宿場町が南北の両側町として形成された。また高輪の方面に歩行新宿が発達した。丁名は、南北とも橋を起点として一丁目から三丁目と相対に付けられ、歩行新宿は高輪方面から一丁目から三丁目と名付けられている。

「浜御殿より品川新宿迄往還道絵巻」は、明和期の淡彩肉筆画であるが、その末尾に、八ツ山からの品川新宿、そして御殿山下の北品川宿の街並みの風景が描かれている。御殿山は、桜の名所として知られ、その高台から江戸前や房総半島を間近に見渡せる景色を楽しんだ。ペリー来航に際し、急遽お台場の築造がこの御殿山を掘り崩して行われたことはよく知られている。また、品川宿の細長い街道沿いには、西側丘陵部にかけて多数の寺院が建立された。その一つ東海寺は、沢庵宗彭が家光の招請により寛永16（1639）年に開基した禅刹である。

さて、品川の歴史は、家康入府よりもっと古く遡れる。江戸の入江に接したこの地域は、目黒川の河口部に位置し、古来より漁師町（漁師町）として栄えていた。品川近くの洲崎の弁天社は、深川の洲崎の弁天社とともに、この間を江戸前とする豊かな漁場であったという。ちなみに、浅草三社祭の船渡御に品川の漁師たちが参加するのも、こうした古い縁によるものである。

## 3. 金地貼札の墨書とその検討

さて、この絵巻には金地貼札が要所要所に付され、そこには墨書で大名家の屋敷や神社仏閣などの名称が53も巻頭から次の順序で記されており、個々の屋敷などについて検証を行い、下記に一覧表を作成

して掲げた。なお、大名屋敷には「様」付けや「屋敷」などの名称が使われており、「上」「中」「下」の格付けや「御蔵屋敷」「御物見」などと性格も記されている。また「関小十郎様」や「本多駒之助様」など幼名の記載により、【表1】では他の大名家についても受領名（官職）から宝暦から明和初期に存在した藩主を該当させた。

【表1】墨署名とその内容

No.	墨書銘	備 考 *は注記
1	濱御殿	将軍家の浜御殿。
2	増上寺	三縁山増上寺。徳川将軍家菩提寺の一つ。
3	関小十郎様	備中国新見藩関家の屋敷。関小十郎とは、第4代藩主関政辰（まさとき）の幼名。宝暦7年〔1757〕生まれ、安永3年〔74〕6月23日没。宝暦10年〔1760〕8月23日家督相続。幼少のため無冠。1万8000石。
4	有馬中務太輔様上	筑後国久留米藩有馬家の上屋敷。第7代藩主・有馬頼僮（よりゆき）は、正徳4年〔1714〕生まれ、天明3年〔1783〕11月23日没。享和14年〔1729〕家督相続。従4位下、左少将、玄蕃頭、中務太輔。21万石。関流和算の大家として知られる。
5	松平右近将監様中	上野国館林藩主松平家の中屋敷。松平武元（たけちか）は、正徳3年〔1713〕生まれ、安永8年〔1779〕7月25日没。享保13年〔1728〕に養嗣子となり家督相続。従4位下、右近衛将監。延享3年〔1746〕西丸老中徳川家治付き、延享4年〔1747〕本丸老中、宝暦11年〔1761〕老中首座。
6	金杉橋	金杉橋。
7	金杉御屋敷	因幡国鳥取藩松平（池田）家の下屋敷。第5代藩主・池田重寛（しげのぶ）は、延享3年〔1746〕生まれ、天明3年〔1783〕10月12日没。従4位下、相模守。親藩。*この場所は、明和期の須原屋茂兵衛板「分間江戸大絵図」では「松平相模」とある。
8	毘沙門堂	松流山正伝寺（日蓮宗）の毘沙門堂。毘沙門天像は江戸三代毘沙門天の一つ。*『江戸名所図会』には「松・林山正伝寺」とあり、挿図もある。
9	七面堂	徳聚山円珠寺（日蓮宗）の七面堂。身延七面山を守護する末法総鎮守七面大明神（天女姿の龍神）を安置。
10	金杉濱	芝金杉浜。網干場。
11	間部下総守中	越前国鯖江藩間部家の中屋敷。第4代藩主・間部詮茂（あきとう）は、元文4年〔1739〕生、天明6年〔1786〕7月2日没。明和8年〔1771〕家督相続。従5位下、下総守。
12	本芝濱	本芝浜。本芝一丁目から四丁目。網干場。雑魚場。
13	本船	沖の帆船。島津藩の藩船か。
14	鹿嶋明神	芝の鹿嶋明神社。
15	松平薩摩守様	大名、薩摩国鹿兒島藩の下屋敷。
16	三田御屋敷	薩摩国鹿兒島藩松平（島津）家の上屋敷。第8代藩主・島津重豪（しげひで）は、延享2年〔1745〕生まれ、天保4年〔1833〕1月15日没。宝暦10年〔1760〕後に家督相続。従3位、薩摩守。蘭癖大名の一人。
17	田町一丁目	田町一丁目。
18	松平阿波守様中	阿波国徳島藩松平（蜂須賀）家の中屋敷。第8代藩主・蜂須賀宗鎮（むねしげ）は、享保6年〔1721〕生まれ、安永9年〔1780〕8月27日没。元文4年〔1739〕に養嗣子となり家督相続。従4位下、阿波守。

19	春日社	三田春日社。
20	松平大和守様下	武蔵国川越藩松平家の下屋敷。第2代藩主・松平直恒(なおつね)は、宝暦12年[1762]生まれ、文化7年1月18日没。明和5年[1768]家督相続。従4位下、大和守。
21	ひちり坂	聖坂。高野聖の開いた坂と伝える。三田功運寺前の坂。別名、竹芝の坂。
22	阿州御蔵屋敷	阿波国徳島藩松平(蜂須賀)家の蔵屋敷。
23	西海寺	周光山済海寺(浄土宗)。江戸三十三観音霊場の26番札所。寺庭よりの眺望絶景なり。この辺を月の岬という。
24	田町八幡宮	三田(御田)八幡宮。芝田町七丁目。三田の惣鎮守。
25	秋月様御蔵屋敷	日向国高鍋藩秋月家の下屋敷。第7代藩主・秋月種茂(たねしげ)は、寛保3年[1744]生まれ、文政27[1819]11月6日没。宝暦10年[1760]家督相続。天明8年[1788]11月6日隠居。従5位下、山城守。*明和期の「分間江戸大絵図」には秋月家の蔵屋敷は不記載。
26	大円寺	泉谷山大円寺(曹洞禅宗)。徳川家康が開基。寛永18年[1641]の江戸大火によりそれまでの赤坂溜池から伊皿子へ移転、寺号を大淵寺から大円寺と改称。明治41年に杉並へ移転。島津家の江戸菩提寺。
27	伊皿子	伊皿子。明国人の伊皿子(いんべいす)の居所と伝えられる。伊皿子坂は、江戸湊の眺望絶景の場所。
28	七間茶屋	七軒茶屋。
29	長應寺	芳荷山長応寺(法華宗)。寛永12年[1635]に高輪へ移転。鶴殿家の菩提寺。文久年中にオランダ総領事館となる。明治37年に北海道天塩村へ移転。
30	大木戸	高輪の大木戸。宝永7年[1710]海道の左右に石垣を築き高札場とする。
31	牛町	牛町。牛小屋が多数ある。近くに車町もあり、運搬の牛車を供給する。
32	泉岳寺	万松山泉岳寺(曹洞禅宗)。曹洞宗江戸三箇寺の一つ。浅野内匠頭長矩と赤穂義士の墓所として有名。
33	石橋	石橋。
34	是の茶や	是より茶屋。茶屋丁。
35	高縄	高輪。古く「高縄原」、「高縄手道」と呼ばれた。
36	大佛	高輪の大仏(おおぼとけ)。帰命山如来寺(天台宗)。本尊五智如来は木喰但唱の造立。
37	太子堂	旭曜山常照寺(天台宗)の太子堂。聖徳太子像を安置。
38	庚申堂	旭曜山常照寺の庚申堂。豪範作の青面金剛像を安置。
39	稲荷社	旭曜山常照寺の稲荷社。高輪の産土神。
40	うきすの森	浮洲の森。鶴喜寿の森、鶴樹巢の森とも。高輪北町。
41	本多駒之助様下	伊勢国神戸(かんべ)藩本多家の下屋敷。本多駒之助とは、第4代藩主となる本多忠斎(ただひろ)の幼名。宝暦5年[1755]生まれ、享和3年[1803]1月22日没。明和3年[1766]に家督相続。従5位下、伊予守。*
42	東禅寺	東禅寺(臨済禅宗)。仏日山東禅寺。妙心寺派の江戸四箇寺の一つ。幕末の安政6年[1859]にイギリス公使館が置かれ、文久年中には二度にわたり襲撃事件(東禅寺事件)が起こった。
43	松平薩摩守様下	薩摩国鹿児島藩松平(島津)家の下屋敷。
44	有馬中務太輔様下	筑後国久留米藩有馬家の下屋敷。

45	松平内膳正様下	伊予国今治藩松平家の下屋敷。第6代藩主松平定休（さだやす）。宝暦2年〔1752〕生まれ、文政3年〔1820〕7月7日没。幼名は吉十郎。宝暦13年〔1763〕に家督相続。明和3年〔1766〕に従5位下、内膳正。後に河内守。*明和元年・2年・4年版の「分間江戸大絵図」には「松平吉十郎、松平主水」とあるが、主水は吉十郎（定休）の父で主水正定温（さだはる）のこと。明和8年版では「松平内セン」とある。
46	内膳正様御物見	伊予国今治藩松平家の物見。
47	木戸	品川の木戸。
48	八ツ山	八ツ山。谷山（やつやま）。大日山ともいう。
49	品川新宿入口	品川新宿の入口。
50	坂の稲荷	北品川歩行新宿の稲荷。
51	御殿山	御殿山。太田道灌の居所があったと伝える。徳川家康の品川御殿があったが、元禄15年〔1702〕の火事に延焼して焼失。寛文期に、吉野桜の苗木を植樹し、春の花見の名所地となる。後にペリー来航に際し、防備のためおの御台場築造にこの山と八ツ山の土を用いたことでも有名。
52	弁天社	品川洲崎の弁天社。仙伏院。
53	東海寺森	万松山東海寺（臨済禪宗）の森。東海寺は大徳寺派禪宗の江戸触頭の一つ。開祖は沢庵宗彭。品川北馬場にあり。

本図を検証するのに際し、『江戸城下編成絵図集 御府内沿革図書』『藩史大事典』『寛政重修諸家譜』『武鑑』ほか、大名家の記録類、『江戸名所図会』などの地誌、また江戸の地図として「江戸大割絵図」【口絵16】や須原屋茂兵衛板行「分間江戸大絵図」【図7・8】などを参照した。明和元年〔1764〕版、明和2年〔1765〕版、明和4年〔1767〕版、明和8年〔1771〕版の「分間江戸大絵図」における、本絵巻の墨書銘を地図上で対比させたものが【表2】である。

これで対比すると、必ずしも当時の受領名と一致しない大名屋敷もあり、また「間部下総守中」とある間部下総守中屋敷は、地図の上では「岡部内セン」と表記され、岡部内膳正の屋敷を意味している。「岡部」と「間部」は漢字表記上類似するパターンなので、今後の検討課題である。「松平右近将監様中」とある松平右近将監中屋敷は、地図上の表記では「松平讃岐」となっている。「本多駒之助様下」は、地図上では「本多豊後」あるいは「本多伊セ（伊勢）」と表記されている。

明和4年版から明和8年版の間で、名前や受領名が変化したのは、「松平大和守様下」に相当する「松平主殿頭」から「松平大和」へと変わった例と、「松平内膳正様下」に相当する「松平吉十郎」から「松平内セン」へと変わった例の、2例が見いだされる。このことを持って、本絵巻の成立が明和4年以降と即断するには早いと思われる。

【表2】明和期の「分間江戸大絵図」の表記比較一覧

No.	墨書銘	明和元年	明和2年	明和4年	明和8年
1	濱御殿	濱御殿	濱御殿	濱御殿	濱御殿
2	増上寺	三縁山増上寺	三縁山増上寺	三縁山増上寺	三縁山増上寺
3	関小十郎様	関小十郎	関小十郎	関小十郎	関小十郎
4	有馬中務太輔様上	有馬中務大輔	有馬中務大輔	有馬中務大輔	有馬中務大輔
5	松平右近将監様中	松平讃岐 (地図の表記)	松平讃岐 (地図の表記)	松平讃岐 (地図の表記)	松平讃岐 (地図の表記)
6	金杉橋	金杉橋	金杉橋	金杉橋	金杉橋
7	金杉御屋敷	松平相模	松平相模	松平相模	松平相模
11	間部下総守中	岡部内ゼン (地図の表記)	岡部内ゼン (地図の表記)	岡部内ゼン (地図の表記)	岡部内ゼン (地図の表記)
15	松平薩摩守様	松平サツマ	松平サツマ	松平サツマ	松平サツマ
16	三田御屋敷	松平薩摩守	松平薩摩守	松平薩摩守	松平薩摩守
17	田町一丁目	田丁	田丁	田丁	田丁
18	松平阿波守様中	松平阿波	松平阿波	松平阿波	松平阿波
19	春日社	春日	春日	春日	春日
20	松平大和守様下	松平主殿頭	松平主殿頭	松平主殿頭	松平大和
21	ひちり坂	ヒシリサカ	ヒシリサカ	ヒシリサカ	ヒシリサカ
22	阿州御蔵屋敷	松平アハ	松平アハ	松平アハ	松平アハ
23	西海寺	サイカイシ	サイカイシ	サイカイシ	サイカイシ
24	田町八幡宮	ハマン	ハマン	ハマン	ハマン
25	秋月様御蔵屋敷	?	?	?	?
26	大圓寺	大エンシ	大エンシ	大エンシ	大エンシ
27	伊皿子	イサラコ	イサラコ	イサラコ	イサラコ
29	長應寺	長ヲウシ	長ヲウシ	長ヲウシ	長ヲウシ
30	大木戸	札之辻	札之辻	札之辻	札之辻
31	牛町	牛丁	牛丁	牛丁	牛丁
32	泉岳寺	泉岳寺	泉岳寺	泉岳寺	泉岳寺
34	是の茶や	茶ヤ丁	茶ヤ丁	茶ヤ丁	茶ヤ丁
35	高縄	高ナワ	高ナワ	高ナワ	高ナワ
36	大佛	大佛	大佛	大佛	大佛
37	太子堂	太子堂	太子堂	太子堂	太子堂
38	庚申堂	庚申堂	庚申堂	庚申堂	庚申堂
41	本多駒之助様下	本多豊後	本多豊後	本多豊後	本多伊セ
42	東禅寺	トウセンシ	トウセンシ	トウセンシ	トウセンシ
43	松平薩摩守様下	松平薩摩	松平薩摩	松平薩摩	松平薩摩

44	有馬中務太輔様下	有馬中務	有馬中務	有馬中務	有馬中務
45	松平内膳正様下	松平吉十郎・松平主水	松平吉十郎・松平主水	松平吉十郎・松平主水	松平内セン・松平主水
48	八ツ山	八ツ山	八ツ山	八ツ山	八ツ山
49	品川新宿入口	品川入口	品川入口	品川入口	品川入口
51	御殿山	御殿山	御殿山	御殿山	御殿山
53	東海寺森	東海寺	東海寺	東海寺	東海寺

#### 4. 本図巻の製作意図など

さて、本絵巻は何のために描かれたのであろうか。御府内から東海道の品川宿までの往還には、大名家の屋敷（上・中・下・蔵屋敷）が多く置かれた。その中でも、「金杉御屋敷」「三田御屋敷」の名称や、江戸湊の「本船」の表記などを考えると、松平薩摩守（島津家）の存在が大きく浮かび上がってくる。

描いた絵師については、署名落款などがなく、また本画の絵師の手になるものとは考え難い筆致である。制作にあたり参考にしたのは、「分間江戸大絵図」などの地図のほか、現地での写生が大きな役割を果たしたであろうことは、その描写内容からも見て取れる。とくに海岸沿いに船からの写生の集成とも考えられる。

四季としては、春の桜の季節を中心に、街道沿いの日常風景を可愛らしく描写している。高輪の木戸の様子【図1】、東禅寺門前の様子【図2】、有馬家下屋敷の前を行く武家の一行の姿は参勤交代の大名行列のミニ版表現であろうか【図3】、品川新宿の旅籠の様子も海岸縁に設けられた川屋での用足しに微笑ましい雰囲気漂わせている【図4】。また本芝浜近くの民家では、洗濯に余念なく物干しに洗濯物が見え【図5】、高輪牛町や車町の周辺では牛が飼われ、車が置かれ、江戸の運送業たる牛車の往来が見える【図6】。

そのほか、大名屋敷の作庭や樹木、泉池、別荘としての屋敷の有り様なども、おおきな特色であろう。また寺院や小祠の実態も、好個の歴史資料である。

#### おわりに

この「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」は、極めて珍しい街道筋を描いた図巻で、西国からの江戸への入り口に相当する海岸沿いの風景は実に見事である。明和期と思われる本絵巻は、大江戸時代の豊かな大名屋敷や神社仏閣、そして江戸前の雑魚を揚げる本芝の浜の様子、交通運輸手段としての牛車の町、高輪の木戸や品川の木戸など、江戸の様子を粗略なタッチながらよく伝えてくれる貴重な資料である。



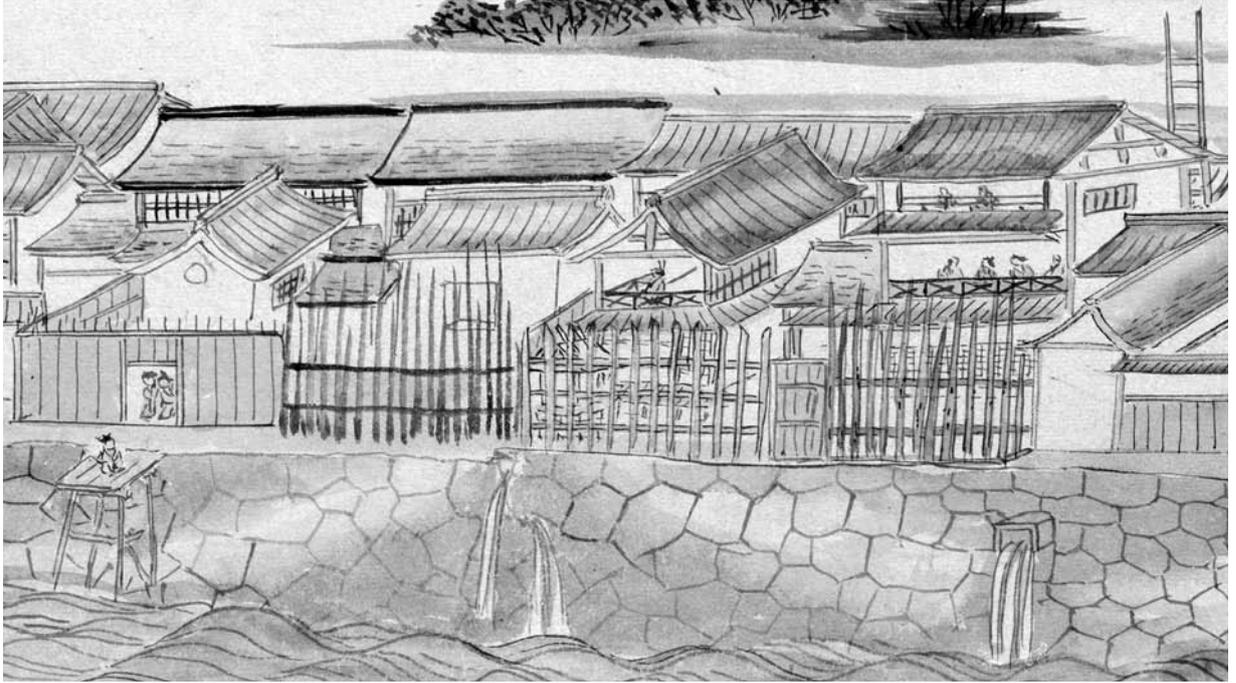
【図1】高輪の大木戸・高札 右手前は七間（軒）茶屋「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」より



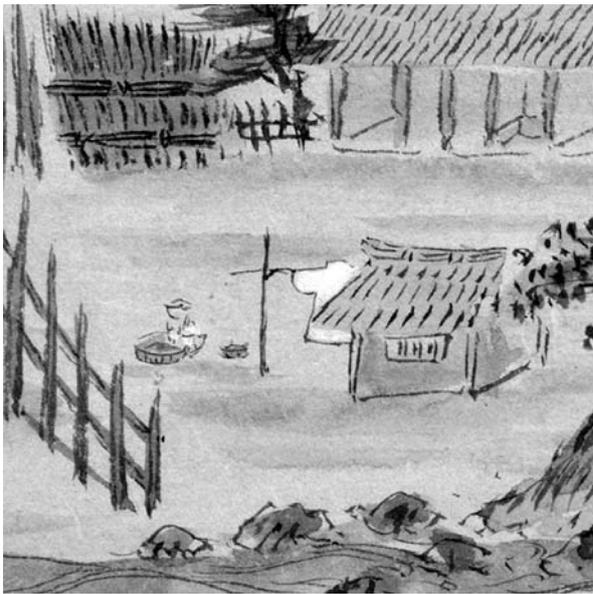
【図2】東禅寺の門前「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」より



【図3】有馬家下屋敷前を行く武家の一行「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」より



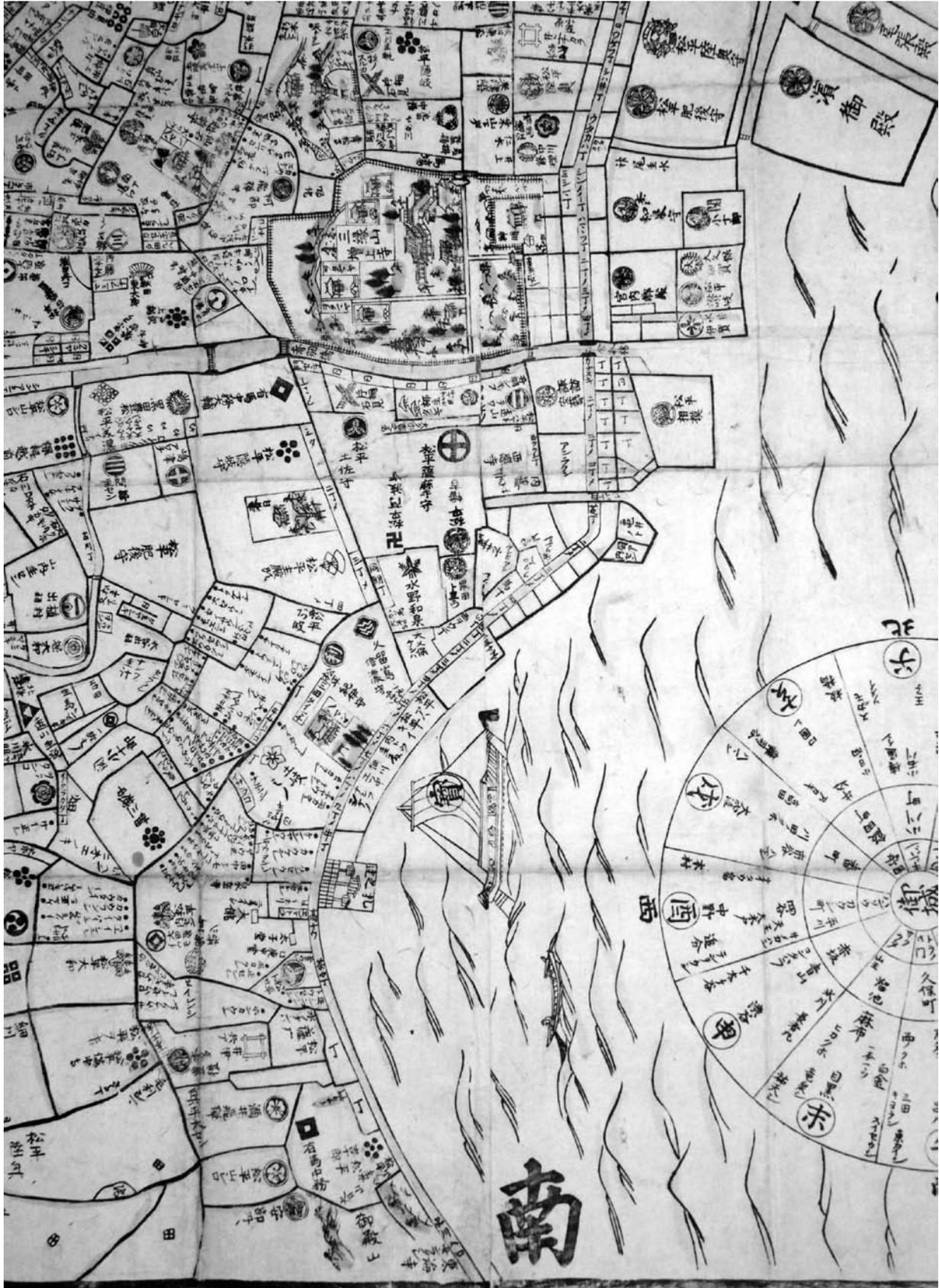
【図4】品川新宿の旅籠（一部三階建）と海辺の川屋「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」より



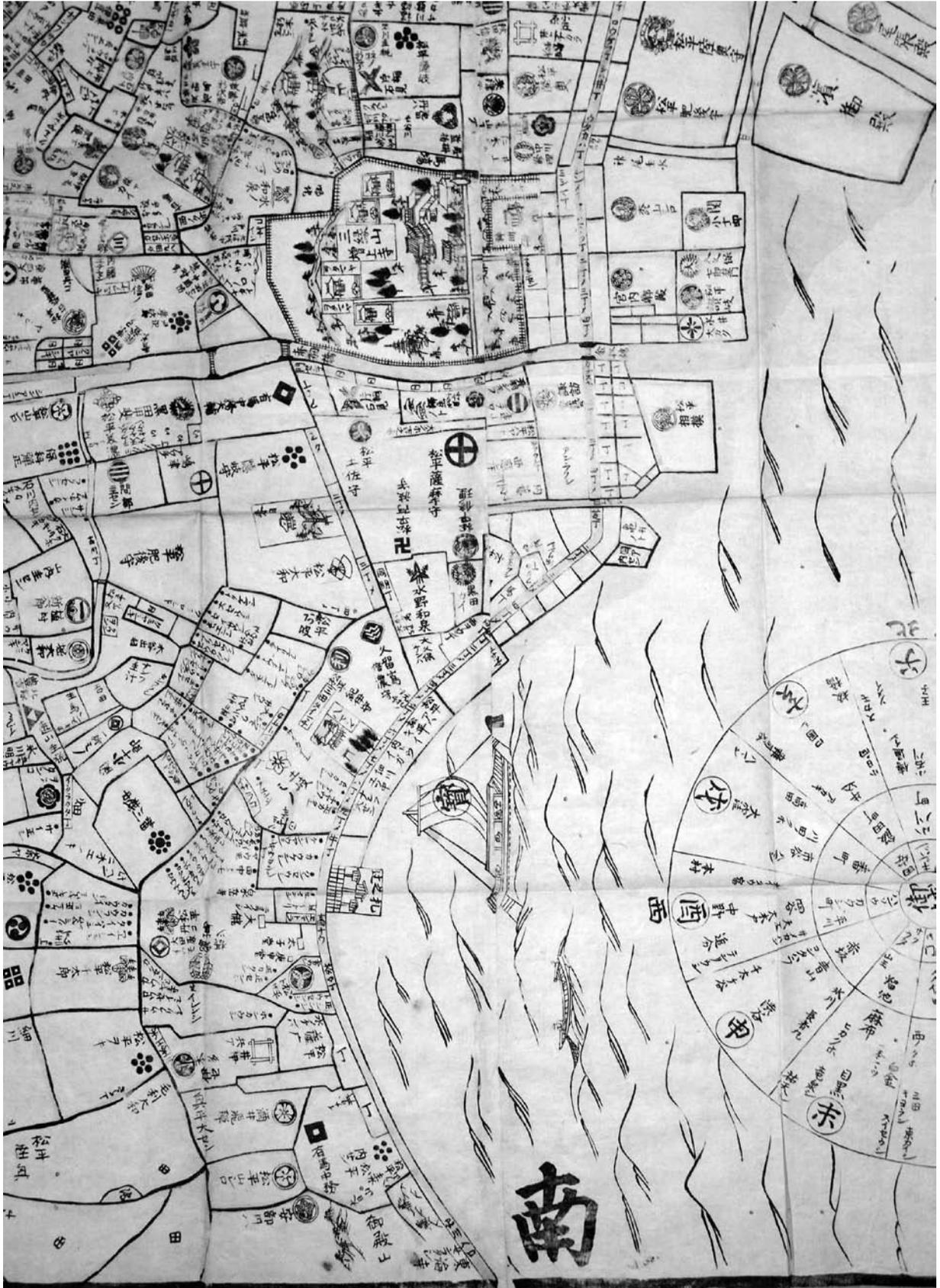
【図5】芝浜近くの民家の洗濯と物干し「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」より



【図6】高輪の牛町辺りの牛車「浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻」より



【図7】明和2年（1765）須原屋茂兵衛板「分間江戸大絵図」より 89211063



【図8】明和8年（1771）須原屋茂兵衛板「分間江戸大絵図」より 95203040